『トスカ』最終盤の宗教的矛盾について

生命科学科　1 年　関根広太

『トスカ』の最終盤で、トスカはスカルピアを刺殺した事を兵士たちに気付かれ、城壁から身を投げる。その際に最期の言葉として「ああスカルピア　神の御前で」と言い自ら命を絶つ。私はこの言動について、舞台がローマ即ち敬虔なカトリック国家であるイタリアであることに矛盾しているのではないかと感じた。故にこの言動について考察していく。

まず 1 つ目の疑問として、なぜカヴァラドッシの名ではなくスカルピアの名を最期の言葉としたのかということがある。1 人の男を愛した女がその人生を締めくくるにあたって呼ぶ名前は、愛する男を死に追いやった張本人よりも愛する男その人の名であるべきではないのだろうか。怒りつまり憤怒はグレゴリウス 1 世によって改正された後の七大罪の一つでもある。しかし実際のトスカの最後の言葉はスカルピアへの怒りであった。この点はキリスト教の教えと実際のトスカの行動が矛盾していると言える。

2 つ目の疑問はなぜ「神の御前で」と言ったのかということである。マタイによる福音書 5 章 27-28 節には「汝、姦淫するなかれ」とある。婚姻関係に無い男女が体の関係を持ってはならないと聖書は教えている。実際に肉体関係を持ったかどうかは描写されてないとはいえスカルピアはトスカにそのような関係を迫った男である。そんなスカルピアが死後神の御前つまり天国に行けるかどうか、と考えると少なくともカトリック的考え方では行けないだろう。即ち私審判でスカルピアが神の御前に行けることはないだろう。であればここで指しているのは最後の審判と言う事になる。しかしながら、最後の審判が行われる世の終わりまでスカルピアに怒りを覚え続けることはキリスト教において正しいことだろうか。憤怒は第一の疑問でも挙げたように七大罪の一つであるから避けるべきことだ。故にこの点もキリスト教の教えと実際のトスカの行動が矛盾していると言える。また、トスカはⅡ幕後半において弔いの儀式のようなことをしており、最後の審判において人の善悪は神が判断するものであり人は知る由もないと考えている場合、上記の憤怒に関する禁忌の問題はなくなる。しかしそこまで神を信じているクリスチャンと言う面があるのに 1,3 の疑問の様な宗教的教義との矛盾があると言う事は却って対比になり作中の矛盾(敬虔なクリスチャンと教えに背いている者が同一人物である)を引き立たせることにもなる。

3 つ目の疑問は、なぜトスカは身を投げたのかいうことである。モーセの十戒には「汝、殺すなかれ」とある。自殺とは自らを殺す行動であるからモーセの十戒に背くものであり、避けるべきはずである。しかしトスカは兵士たちに追い詰められたとはいえ城壁から身を投げ自ら命を絶つという選択をしている。これはカトリック的考え方では許されることではない。と、言ってもこの点については一概に疑問 1,2 と同一に考えることはできない。もしトスカが自ら命を絶たなかったとしたら、スカルピアの敵討ちとしてスポレッタは部下に、よ

り惨い仕打ちをするよう命じるだろう。ただ殺されるだけならまだましだろうが部下たちが抵抗もできないトスカを強姦する可能性もある。そうなれば「汝、姦淫するなかれ」に抵触する。故にこの選択は命を絶つ方を選んでも絶たない方を選んでも何かしらの戒律を犯してしまうことになってしまうから、一概に 1,2 の疑問とは同一に考えられない。とはいえ結局台本自体に宗教的矛盾が生じていることに変わりはない。

　サルドゥの原作によればトスカは田舎娘であったがために感情を隠すことがない性格になったようだ。しかしただ田舎娘としてのキャラクター性を作りたいのであれば敬虔なクリスチャンで神の教えに背くことの無い田舎娘として作っても良かっただろう。わざわざ激しい憤怒や嫉妬と言った感情を抱く性格として作られているのには何か意図があるように思える。さらに、2 つ目の疑問の後半で述べたように、物語の途中でトスカは敬虔なクリスチャンとそうでない者の 2 面性を表している。これらの宗教的考え方とそれに相反する演出の矛盾について、作曲者であるプッチーニが意図的に作ったものではないかと私は考える。プッチーニ自身は宗教音楽家の家系であったためキリスト教についてある程度の知識と理解があった。プッチーニは今回挙げた矛盾を作中に仕込むことにより「人は常に教えに従うわけではない」と言う現実をオペラと言う娯楽の中で表現しようとしたのかもしれない。

参考

日本基督教団　札幌教会
http://www.jcu-sapporo.com/
プッチーニ生誕 150 周年記念作品　プッチーニの愛人
http://puccininoaijin.com/special/index.html